

筑波大学社会・国際学群国際総合学類

卒業論文

国際協力におけるスタディツアーの役割

—カンボジアを事例に—

2018 年 1 月

氏 名：宮沢 萌

学籍番号：201410413

指導教員：関根久雄

目次

第1章 序論	1
1. 問題設定	1
2. 研究方法と章構成	2
第2章 スタディツアーについて	5
1. スタディツアーとは	5
(1)スタディツアーの定義	5
(2)スタディツアーの登場	7
2. スタディツアーの正のインパクト	9
(1)参加者の視点	9
(2)主催者の視点	10
(3)受け入れ側の視点	11
3. スタディツアーの負のインパクト	11
(1)参加者の視点	11
(2)主催者の視点	11
(3)受け入れ側の視点	12
第3章 カンボジアにおける事例	14
1. カンボジアスタディツアーの概要	15
(1)ボランティア・プラットフォームのカンボジアスタディツアー	15
(2)ピース・イン・ツアーのカンボジアスタディツアー	16
2. スタディツアー参加者の声	17
3. スタディツアー主催団体関係者の声	29

4. スタディツアーを受け入れる現地の関係者の声	32
第4章 結論	36
注.....	39
参考文献.....	42
Summary	44
謝辞.....	45

表目次

表1 インタビュー対象者一覧.....	15
---------------------	----

第1章 序論

1. 問題設定

長年、観光は発展途上国にとって経済上の万能薬であるとみなされてきた。公害のない産業と呼ばれ、きわめて重要な開発要因と考えられており、先進国から途上国に向かう観光という面では、途上国が渴望する外貨を生み出し、途上国経済に欠かせない資本を注入するものとみられてきた [オPPERマン・チョン 1999:13]。しかし、そのような大量生産・大量消費の観光、つまり、マス・ツーリズムの発達は様々な悪影響をもたらした。具体例としては、施設建設による環境破壊や、廃棄物の増大、伝統的地域文化の変容などが挙げられる [東 1999:4-7]。また、外貨を生み出すはずであったのにも関わらず、実際はそれほど外貨収入を得ることができなかった [鈴木 1987:5]。このようなマス・ツーリズムのあり方に対する批判は 1950 年代中頃から 1960 年代にかけて出始めるようになり、1970 年代に盛んに展開されるようになった。そして、1980 年代からは「オルタナティブ・ツーリズム」が提唱されるようになり、マス・ツーリズムに「代わる」新たな観光のあり方や、従来のマス・ツーリズムとは性格を異にする「もう一つの」観光形態を模索しようとする議論が盛んになった [東 1999:4-7]。

これらの新しい観光形態には様々なものがあるが、後者の「もう一つの」観光の中に「スタディツアー」が存在する。スタディツアーとは、相互理解や体験学習を目的としておこなうツアーを指し、「享楽志向」「受け身」「自己中心的」「無責任」という性格の [東 1999:4] 単なる観光旅行とは異なり、「現地事情や、NGO 活動等を学習できる」「現地の人々と同じ目線で交流できる」「参加者自らが活動に参加できる」 [田中 2001:4] という特徴を持つ。このスタディツアーは NGO 団体によって始められたものである。1980 年代に元々は NGO メンバーを現地に派遣するところから始まり、1990 年代に一般向けに募集をおこなうようになると急速に拡大していった [藤山 2011:118]。現在、ツアーの主催者は多岐に渡り、NGO や開発教育団体、青少年団体、自治体国際化協会、キリスト教会などが実施している。また、最近では旅行会社が企画したり、高校や大学の国際関係のゼミなどで実施されたりもしている。2008 年時点で、国際協力 NGO センター (JANIC) に登録する約 400 の NGO のうち、約半数の団体がスタディツアーを実施しており、この NGO 主催のスタディツアーへの参加者は、

年間で延べ1万人を超えると推定される〔高橋 2008:150〕。

以上のように、現在人気のスタディツアーであるが、受け入れ側には様々な負のインパクトもあるといわれている。ツアー参加者が与える金品がもたらす現地への混乱、参加者の都合を優先し受け入れ側に無理を強いること、参加者の受け入れ側に対する無関心や批判的な発言などがその一例である〔高橋 2008:155〕。NGO は、軍縮と平和、貧困解消と開発、人権、ジェンダー平等、環境といった世界的な問題に取り組む市民団体である〔高柳・馬橋 2007:12〕。しかし、その問題解決に取り組む NGO が始めたスタディツアーにより、途上国に不利益が生じているのである。

そこで本稿では、実際にスタディツアーに参加した人や、主催している団体、受け入れている現地の人にインタビュー調査をおこない、負のインパクトがあるにもかかわらず、なぜスタディツアーが催行され続けているのかを探る。そして、その結果を参考に、スタディツアーが国際協力という面においてどのような役割を果たしているのか明らかにしたい。その際に、スタディツアーの行き先としてよく挙げられるカンボジアを事例に取り上げ研究を進める。

2. 研究方法と章構成

スタディツアーや、NGO 活動、国際協力、観光に関する文献や学術論文等の先行研究、Web サイト等の参照をおこなう。また、事例として、カンボジアスタディツアーを取り上げ、その参加者、主催団体の関係者、現地の受け入れ側の関係者へのインタビュー調査をおこない、その結果からスタディツアーの実態についてまとめていく。

なぜカンボジアを事例として選んだのかというと、スタディツアーが行われている件数が多いためである。スタディツアーの行き先としては途上国が多く、その中でもカンボジアはよく取り上げられている。筆者の調べによると、インターネット上でスタディツアーの参加者を募集している団体 40 のうち、行き先にカンボジアがあるのは 15 で、これはフィリピンと並んで一番件数の多い行き先となっている⁽¹⁾。

それでは、なぜカンボジアにおけるスタディツアーが多いのか、その歴史から考えてみよう。1887 年からカンボジアはフランスの植民地であり、フランスの支配下では、略奪、暗殺、婦女暴行などが横行していた。そのような状況の中、1941 年にはフランス側は当時 19 歳のノロドム・シアヌークを「扱いやすそう」という理由で新国王として選んだ。しかし、そのシアヌークはカンボジアを独立へと導き、1953 年にカンボジ

ア王国の誕生を宣言した。1970 年、シアヌークと考えの合わない保守派のロン・ノルらがクーデターを起こす。それに対しシアヌークは、ロン・ノル政権打倒を呼びかける「カンプチア民族統一戦線」を結成して対抗しようとした。また、その際、反ロン・ノル、反米帝国主義という点で利害が一致したため、共産主義勢力「クメール・ルージュ」と手を組んで戦った。5 年後、戦いはクメール・ルージュの勝利で幕を閉じ、平和が訪れるかに思われた。しかし、その後クメール・ルージュの中で政権を握った波尔・ポト派は、多くの知識人を虐殺した。これにより、1975 年から 1978 年の 4 年足らずの間に数 10 万人から 100 万人のカンボジア国民が命を落としたとされる [永井 1994:37-57]。

以上のような歴史から、カンボジアでは知識人である教師が多く殺されており、現在も教員不足が続いており、教員 1 人が受け持つ生徒数が 60~70 人と多くなることもある⁽²⁾。つまり、教育がきちんと行き届いていないということである。そのためか、NGO、NPO 団体がカンボジアに学校を建てるというのをよく目にする。NGO 活動推進センターが毎年発行しているダイレクトリーによれば、NGO が関わる活動別の内訳を見ると、教育分野、中でも途上国での学校建設に取り組む組織の割合が多く、ネパール、タイ、フィリピン、カンボジア、アフリカ諸国へと学校建設が広がっているという [三好 2001:200]。また、その影響かスタディツアーも小学校や寺子屋などを訪問する教育系のスタディツアーが多くなっている。筆者が調べたカンボジアスタディツアーを企画している 15 の団体のうち、9 つの団体が教育系のスタディツアーを行っている。このことから、カンボジア国内で NGO 団体の支援を受けているところが多いために、スタディツアーの行き先になりやすいと考える。

また、スタディツアーには観光的要素もある。カンボジアには、その観光の行き先として、世界遺産の中でも人気が高いアンコール遺跡群があるのもスタディツアーが多い理由の 1 つであると考えられる。Web 上で世界遺産の人気ランキングを検索したところ、いくつかのサイトが出てきたが、どのサイトでもアンコールワットが 1 位や 2 位などの上位になっている⁽³⁾。そこを訪れられるのであれば、人気のツアーになりうると予想できる。

以下章構成について述べる。第 2 章ではスタディツアーの定義や成り立ち、良い面と悪い面についてまとめ、第 3 章では筆者も参加したスタディツアーに関わる様々な人にインタビュー調査をおこない、実態としてどうなっているのか考察していく。そ

して、第4章を結論とし、第2章、第3章を踏まえた上で、スタディツアーが国際協力という面においてどのような役割を果たすのか明らかにし、今後の課題を示す。

第2章 スタディツアーについて

本章では、スタディツアーや国際協力、観光に関する先行研究をまとめ、スタディツアーの成り立ちや、それが与えるインパクトなどについて言及し、スタディツアーの特徴を示す。第2節、3節で述べるスタディツアーのインパクトについては、アクターごとに分けて記述する。本稿で登場するアクターは参加者、主催者、受け入れ側の3つに分かれており、本稿では、参加者はスタディツアーに参加する一般人、主催者はスタディツアーを企画・実施する団体、受け入れ側はスタディツアー参加者を受け入れる訪問先の人々のことを指す。

1. スタディツアーとは

(1)スタディツアーの定義

スタディツアーについて明確な定義はないため、本稿での定義を決める。そのために、まずは様々な文献での定義を紹介していく。

スタディツアー研究会は、1997年に「スタディツアー」の定義を以下の通り定義している。この研究会は、スタディツアー実施団体の情報交換や協力を促進し、かつスタディツアーの質的向上により地球市民の育成をはかり、開発協力に寄与することを目的に活動している組織である⁽⁴⁾。

スタディツアーとは、「国際協力・交流市民団体(NGO)などが相互理解や体験学習を目的としておこなうツアー」をさし、観光のみの旅行とは異なり「現地事情や、NGOの活動などを学習できる」「現地の団体や人々と、同じ目の高さで交流できる」「参加者自ら、プログラムに参加、協力できる」という特徴をもつ。団体によっては同様の特徴をもつツアーを「ワークキャンプ」と呼ぶところもある。見学・視察中心のものを「スタディツアー」、作業が中心のものを「ワークキャンプ」と呼ぶことが多い[田中 2001:4]。

上記の定義には、「国際協力・交流市民団体(NGO)などが相互理解や体験学習を目的としておこなうツアー」とあるが、NGO以外にも地方自治体、教育機関、宗教団

体など様々な団体が実施している[田中 2001:4]。そのため、主催団体の記述に関して足りない部分があるといえよう。

また、開発教育協議会⁽⁵⁾の機関誌『開発教育』の編集部所属⁽⁶⁾の鈴木はスタディツアーをオルタナティブ・ツアーの特徴を強調したものだとして、次のように述べている⁽⁷⁾。

オルタナティブ・ツアーはもともと、単に新しさ、物珍しさを求めるのではなく、現地をもっとトータルに、深く理解しようという学習的性格を持っているわけですが、この側面を強調したのがスタディー・ツアーだと思います [鈴木 1987:6]。

次に、藤原⁽⁸⁾によるスタディツアーの定義を確認する。

スタディツアーとは、NGO（国際協力・交流の市民団体）、大学・学校、自治体、宗教団体などが組織的かつ継続的に、相互理解や体験学習を目的として行うツアーであり、内容的には、観光のみならず、現地事情や NGO による活動などの学習、現地の団体や人々との双方向的な交流、参加者自らの参加、体験、協力などが可能なプログラムを持ったツアーである。また、事前事後の学習やふりかえり、現地で見聞し、交流し、体験するなかで得る学びの共有やふりかえりがなされることによって、自己の実存的な変容とそのプロセスを伴うツアーであり、それによって、他者および自他の地域への貢献・還元が生じ、グローバル社会の課題と展望、支え合いを生み出していく教育活動である [藤原 2014:36]。

藤原の定義がスタディツアー研究会や鈴木のと異なるのは、スタディツアー参加後のところにも触れている点である。スタディツアーに参加することでどのような変化があるのか記述しており、スタディツアーという言葉をもっと詳しく説明している。

以上の内容を踏まえ、本稿ではスタディツアーを以下のように定義する。

スタディツアーとは、「現地事情や、NGO の活動などを学習できる」「現地の団体や人々と、同じ目の高さで交流できる」「参加者自ら、プログラムに参加、協力でき

る」という特徴をもち、NGO だけではない様々な団体が実施している見学・視察中心のツアーであり、オルタナティブ・ツアーの一種ともいえる。また、その活動により、参加者の実存的な変容とそのプロセスを伴い、それにより、自他の地域への貢献が生じ、グローバル社会の支え合いを生み出していく活動でもある。

(2)スタディツアーの登場

世界観光機関によると、国際観光客到着数は 1950 年の 2,500 万人から、1980 年には 2 億 7,800 万人、2000 年には 6 億 7,400 万人、そして 2016 年には 12 億 3,500 万人と、世界全体で増加してきた [世界観光機関 2017:2]。現代観光の初期形態であるマス・ツーリズムは、大衆がレジャー活動としての観光に広く参加する現象をさす [安村 2001:18]。このマス・ツーリズムの発達・拡大を可能にした条件として、所得水準の向上と余暇時間の拡大といった需要サイドの条件に加え、インフラの整備やテクノロジーの発達による旅客輸送の大量化・遠距離化・高速化、新たな目的地の開発や大規模観光施設の整備、安くて簡単な旅行手配を可能にした旅行商品の発達などといった供給サイドの条件、さらには、海外渡航や外貨持ち出し制限などの旅行規制の撤廃・緩和、国・自治体・各種団体による観光の政策的普及と社会的支援など様々な諸条件が挙げられる [東 1999:3]。

この発展してきたマス・ツーリズムは「経済的富を生み出す仕組み」として大きな役割を果たしている。こうした経済的富を生み出す仕組みとしてのマス・ツーリズムは、経済発展に遅れをとった地域にとって、経済発展の機会を提供しうるものとして注目され、多大な期待を寄せられたのである [東 1999:4]。高寺も、開発途上国において国際ツーリズムが発展することにより、様々なメリットが生じると指摘している。具体的には、ツーリズム産業の登場による雇用増大、その中でも女性や若年層の雇用創出への寄与、国の収入源の多様化による経済の安定などがあり、その他にも他産業への波及効果は大きいとしている [高寺 2004:65]。

しかし、途上国における観光開発の多くは、行政支援のもと、外来資本を導入し、大量の観光客誘致を目指して大規模かつ性急な観光開発が推進されたがゆえに、受け入れ地域に対して様々な悪影響をもたらしてしまう。その悪影響とは、大規模観光施設の建設など開発行為に伴う悪影響、事業活動に伴う悪影響、観光客の入れ込みに伴う悪影響、その他の悪影響、の 4 つである。それぞれ具体的に説明すると、大規模観

光施設の建設など開発行為に伴う悪影響は、施設建設による自然景観や生態系、歴史的街並みなどの景観の破壊などのことである。2つ目の事業活動に伴う悪影響は、宿泊施設・飲食施設などでの水やエネルギーの過剰消費、資源浪費、廃棄物の増大などを指す。3つ目の観光客の入れ込みに伴う悪影響は、伝統的文化地域の変容、地元の文化的規範を無視した行動による文化摩擦、物価の高騰、治安の悪化などである。最後のその他の悪影響には、インフラ等の整備に要する財政負担、開発の是非に関する住民の対立などがある〔東 1999:5〕。また、その他にも、観光開発に必要な様々な施設等のための資本、ノウハウ、輸入資材・機材は途上国が自力でまかなうのは不可能なため、外国の銀行からの借り入れ、投資に頼ることとなり、観光業の外国支配が強まったり、観光客を引き寄せるために、女性が売春など性を売りものにしたりという事態も起きた。しかも、以上のような弊害は、経済的富を生み出すためにおこなわれてきたものであったのにも関わらず、思ったほど外貨収入を得られないという結果まで出てきてしまう。これは、輸入品の代金支払い（外国資本による投資の）利潤還流、経営料などの「流出」により、売り上げの大部分が食われてしまうからである〔鈴木 1987:5〕。

以上のようなマス・ツーリズムによる悪影響を受け、1950年代中頃から1960年代にかけて、マス・ツーリズム批判が出始め、1970年代から盛んに議論されるようになってきた。さらに、1980年代後半からは「オルタナティブ・ツーリズム」が提唱され始め、マス・ツーリズムに「代わる」新たな観光のあり方、従来のマス・ツーリズムとは性格を異にする「もう1つの」観光形態を模索しようとする議論が盛んに展開されるようになる。前者のマス・ツーリズムに「代わる」新たな観光のあり方としては、「ソフト・ツーリズム」、「ロー・インパクト・ツーリズム」、「責任ある観光」、「適正観光」などが挙げられる。一方で、後者の従来のマス・ツーリズムとは性格を異にする「もう1つの」観光形態としては、「エコツーリズム」、「グリーン・ツーリズム」、「カルチュラル・ツーリズム」、「スタディツアー」などが挙げられる〔東 1999:7〕。ここで「スタディツアー」が登場するのである。ただし、ここで注意すべきは、「スタディツアー」が元々はマス・ツーリズムと対立するものではないということだ。18世紀の旅行にも教育は大切な要素であったし、学校がおこなう修学旅行もマス・ツーリズムと教育とが融合したスタディツアーともいえるからだ。しかし、近代観光の大衆化・娯楽化が進むにつれ、スタディツアーはマス・ツーリズムに対する対抗的文脈の中に

位置づけを得るようになった [山中 2001:11]。

このスタディツアーは、1980 年代初頭から NGO 活動に携わっているスタッフの自身の訪問活動という形で始まっている。最初は活動している国の現状および活動現場を知るためにツアーを組み、呼びかけもその団体に係わっているボランティアや支援会員が対象の、いわば身内のツアーであった。1990 年代に入ってから一般へも広く呼びかけを実施するようになってきたが、これは海外旅行者の増加と共に観光以外の要素をもった旅行へのニーズが増え、また国際交流・国際協力への関心が高まってきた結果と言える。[田中 2001:4]。観光以外の要素を求めたツアーの需要に、旅行業界のツアーだけでは供給が追いつかなかったために NGO スタディツアーも増加してきたのである。

以上のように、スタディツアーはマス・ツーリズム批判からオルタナティブ・ツーリズムが生まれる流れの中でその 1 つの形態として誕生した。そして、元々は NGO スタッフのためのものであったが、観光以外の要素を含んだツアーを求める世の需要に答えるべくしてスタディツアーが一般にも提供されるようになっていったのである。

2. スタディツアーの正のインパクト

(1)参加者の視点

前節のスタディツアーの定義にある、スタディツアーの特徴である「現地事情や、NGO の活動などを学習できる」「現地の団体や人々と、同じ目の高さで交流できる」「参加者自ら、プログラムに参加、協力できる」というものが参加者にとってのメリットである。ただ見るだけの観光とは違い、実際に交流することで様々なことを学ぶことによる自己の成長などが期待できる。具体的にどのようなことに気づくのかというと、現地の人の生活を見て、生きる喜びや誇り、自分が与えられている環境のありがたさに気づく、自分の見聞きしたことに衝撃を受け、それを伝える必要性に気づく、物乞いをする子どもなどを見て金銭に関する葛藤を感じ、どうするべきなのかを考えさせられる、などの例が挙げられる [高橋 2008:153,154]。このような気づきにより、参加者の内面に変化が起こりうる。この変化により、参加者がその後国際協力活動の担い手として成長していくということも少なくない [田中 2001:7]。この変化は受け入れ側や主催者の正のインパクトにもつながると言える。しかし、その一方で、必ずしも NGO 活動に共感や関心を持たない、自己本位の参加者も増えている。これは、事前

学習や事後学習もなく、「お固い」レクチャーや「学習支援」もないツアーが増えてきているからだろう。遊び、作業、日本語教授、料理作りなどの体験があるだけという「気軽さ」が、自分探し、感動・交流の旅を求める若者のニーズに合っているのかもしれないと藤原・栗山は述べている〔藤原・栗山 2014:45-47〕。

以上のように、ツアーの参加者たちは、ツアーを通して、自分たちのためになる自己成長を獲得できる。しかし、その他に、国際協力や NGO 活動、途上国というところに興味を持つかどうかはその人次第になっている。これはスタディツアーの定義の「グローバル社会の支え合いを生み出していく」という部分につながりにくくなってしまう。たしかに、参加者各自の自己成長が直接的ではないにせよ、いずれ何らかの形で支え合いに結びつくという可能性もある。しかし、事前学習等をおこなっていた場合に比べ、おこなわないほうが国際協力への興味・関心が薄いため、支え合いにつながるのが難しくなっているともいえる。様々なスタディツアーがあるとはいえ、事前学習等ははずしてもいいものなのか議論すべきところである。

(2)主催者の視点

主催者にとっての正のインパクトは、スタディツアー研究会が 1999 年に NGO を対象におこなったアンケート調査によると、「現地事情やプロジェクトの理解」(94%)、「グローバルな視点を得てもらう」(55%)、「会員・支援者の拡大のため」(48%)、「収益事業として」(19%)、ツアー参加者による「支援事業実施のため」(16%)、「会員への情報提供サービス」(13%) という結果であった〔田中 2001:6〕。つまり、主催者たちには、現地事情やプロジェクトを会員や一般の人に理解をしてもらうことで支援を拡大させていき、また、活動費を稼ぐことができるという正のインパクトがあるということである。

ここで、アンケート結果の上位 2 項目とそれ以下の項目とでは、少し内容が違う点に注目したい。主催団体の視点に立って考えた際、上位 2 項目は自分の団体だけに問わずに、国際協力という部分への理解や興味を求めており、それ以下の項目が自分の団体の運営等に関わることとなっている。つまり、主催団体の関係者は、もちろん自分の団体のことも考えてはいるが、それよりも業界全体に対する理解のためにスタディツアーをおこなっていると考えられる。

(3)受け入れ側の視点

受け入れ側としての正のインパクトには、大きく2点あり、現金収入があることと、外国人が自国の文化に興味をもってくれることの嬉しさというものが挙げられる[田中 2001:8]。しかし、現金収入はスタディツアーに携わった一部の人しか得られないため、コミュニティ内での問題の原因となる可能性もある。また、後述するが、自国の文化に興味をもってくれて嬉しいと感じる人ばかりではないというのも現状である。受け入れ側には正のインパクトももちろんあるものの、負のインパクトを受けることも多々ある。この点については次節にて詳しく述べる。

3. スタディツアーの負のインパクト

(1)参加者の視点

参加者への負のインパクトとしては、スタディツアーの財政的な基盤が参加者個人に依存しているため、短い日程の中に盛りだくさんなイベントを詰め込まれ、未消化なまま受動的に受け入れてしまいがちだということが挙げられる[山中 2001:13]。つまり、スタディツアーの特徴である「参加者自ら、プログラムに参加、協力できる」ということが十分に生かしきれていないのである。

また、他の負のインパクトとして、悲惨な現場を見て衝撃が大きかった場合には、絶望感にとらわれたり、人間不信になったり、目をそむける対応しかできなくなったりするということもある。このように与える衝撃の大きいものに向き合う際は、なぜそれが起きたのか、なぜそれが防げなかったのか、今後どうすれば防げるのか、どうすれば犠牲者を援助できるのかなど、解説をして導いてくれる人が必要になる[市原 2004:137]。こちらも上記のインパクトと同様、ショックを受けただけでは消化しきれない可能性があるからだ。きちんと理解し、自分に生かしていくためには、補助も必要であるということである。

(2)主催者の視点

主催者にとっての負のインパクトには、元々現地の支援をするための団体の場合、スタディツアーが継続的に行われることで、団体の活動資金の収入源の多くをスタディツアー案内料から得るようになり、団体の活動のメインがスタディツアーの企画・運営になってしまうというケースが挙げられる[山中 2001:13]。この団体の活動資金

をスタディツアーから得られるというのは、前節の正のインパクトにも挙がっていた。スタディツアーは現地を支援するという目的のための収入源だったはずが、いつの間にか収入を得ること自体が最大の目的になってしまうということである。

(3)受け入れ側の視点

スタディツアーが受け入れ側に与える負のインパクトとしては、与えられた金銭や物品による混乱、貧しい生活を見られる恥ずかしさ、参加者の都合で現地に無理を強いること、参加者の無関心な態度や批判的な発言、受け入れ側に何のフィードバックもないことなどが挙げられる。

1つ目の与えられた金銭や物品による混乱に関する事例はいくつかある。現地の労働組合の集会のためにと寄贈されたラジオが私物化された事例や、工場労働者の就労環境改善のためにと寄付された耳栓が闇に流されてしまったという事例がある〔山中 2001:12,13〕。また、孤児院を訪問した時に、高額の米ドル紙幣を直接手渡そうとした参加者がいた。この行為は孤児達に「スタディツアーが来たらまたお金をもらえるかもしれない」という期待を無責任に植えつけてしまう結果となったという〔高橋 2008:155〕。このように、受け入れ側の人々を潤すはずの寄付品がその人々の中にトラブルを持ち込むこともある。これは、支援する側とそれを受ける側での金銭感覚の差により生じるものである。金銭感覚に差があるために、日本人を相手にするのと同じ感覚で、その土地の発達レベルに合わない高価なものを渡したりすると、無駄になる配慮なき善意が、破壊や無駄を生んでいる例は少なくはない〔市原 2004:168〕。

次に、2つ目の心理的な負のインパクトに関して、スタディツアーを受け入れる人々が、貧しい生活を見られるのが恥ずかしいと感じたり、金持ち日本人学生の遊び相手ではないと思ったりすることもあるようである〔田中 2001:8〕。これは主催団体が配慮していかなければいけない部分である。

以上2点の、金銭や物品を得られる、外国人に自分たちの生活を見られるという点では、前節で述べた正のインパクトとも共通するが、それによる影響には肯定的な面、否定的な面の両面があるということである。

次に、3つ目の負のインパクトである、参加者の都合で現地に無理を強いることというのは、具体例でいうと、ツアー客が多くなる日本の夏期休暇中はちょうどカンボジアでも夏期休暇中に当たるが、参加者の強い希望により、無理やり現地の教員を動

員して学校現場を「作った」ことがあったというものがある [高橋 2008:155]。

4つ目の負のインパクトである、参加者の無関心な態度や批判的な発言があると、これにより受け入れ側に不快感や不信感を与えてしまう。JICA カンボジア事務所 NGO コーディネーター⁽⁹⁾の経験がある高橋によると、受け入れ側の説明に対して、喧嘩腰に ODA 批判をしたり、あるいは居眠りをしたりという言動に不快感を与えられた場合があったという [高橋 2008:155]。これを防ぐためには、事前にそのようなことがないように参加者にしっかりと説明しておく必要がある。しかし、最終的にどうするかは、参加者にゆだねられてしまうため、これを完全に解決するのは困難である。

最後に、5つ目の受け入れ側に何のフィードバックもないことが挙げられる。具体的に、主催団体から現地の受け入れ側に何のお礼もない場合である [高橋 2008:155]。ここまで述べてきた様々な負のインパクトがあるのにも関わらず、スタディツアーを受け入れてくれた現地の人々に対してお礼なしでは、二度とツアーを受け入れてくれない可能性もある。そのため、帰国後に礼状を出したり報告書を送ったりすることに配慮すべきであると市原は述べる。ここで注意すべきなのは、お礼の品として、訪問先に「おみやげ」を持っていくのは考えものであるということである。日本人は、訪問のしるしに「手みやげ」をもっていくのが常識であり、おみやげが訪問や会談の内容より気遣われていることがある。しかし、外国の常識ではプレゼントは「相方向」でおこなうものだという考えが普通である。そのため、おみやげを持っていくよりも、その場で具体的な内容をともなった評価や感謝を伝えることが大切なのである [市原 2004:170]。

ここまで、5つの負のインパクトを述べてきたが、受け入れ側に不満があっても日本人が現地の人々から不満を聞きだすことは難しい状況にある。なぜなら、スタディツアーを受け入れているコミュニティは、実施団体から支援を受けている場合が多く、「不満を言えば援助が途絶えてしまうかもしれない」といった不安があるためである [田中 2001:8]。スタディツアー主催団体が、支援とスタディツアーの両方をおこなうことで、このような弊害も生まれるのである。

第3章 カンボジアにおける事例

本章では、筆者も参加したカンボジアのスタディツアーに関わる様々なアクターにインタビューをおこない、その結果からスタディツアーの実態を探る。

今回のインタビューはスタディツアーを様々な角度から見るために、主に3通りに分けられる人々を対象に行った。その集団は以下の通りである。

A：スタディツアー参加者（X：ボランティア・プラットフォームのツアーに参加、

Y：ピース・イン・ツアーのツアーに参加）

B：スタディツアー主催団体関係者

C：スタディツアーを受け入れている現地の関係者

インタビュー対象者を上記の分け方にもとづいて一覧にすると表1の通りになる。なお、A1-Xは集団Aに属し、ボランティア・プラットフォームのツアーに参加した人のことを指す。また、BC1などは集団Bかつ集団Cに属することを指す。集団Aの「その他」の欄に、参加した年以外に記載がない場合、単なる観光以外の海外経験が他にないことを示す。さらに、A1-XとA2-Xが参加したボランティアは第3章4節にて後述するボランティア・プラットフォームがおこなうボランティアで、A4-Xが参加したのは他社のボランティアである。

下記の対象者へのインタビュー結果を集団ごとにまとめる。

表 1 インタビュー対象者一覧

対象者	職業	性別	その他
A1-X	26歳、フリーター（2018年4月からは養護教諭）	女	2014年参加、同年ベトナムスタディツアーにも参加、2016年半年間のボランティアに参加
A2-X	23歳、介護職	女	2016年春参加、2016年夏16日間のボランティアに参加
A3-X	21歳、保育士	女	2015年参加
A4-X	23歳、旅行会社勤務	女	2015年参加、前年にベトナムのボランティアに参加
A5-Y	高校3年	男	2017年参加
A6-Y	大学3年	女	2017年参加
A7-Y	大学1年	女	2017年参加
A8-Y	大学4年	女	2017年参加
A9-Y	大学1年	女	2017年参加
A10-Y	高校3年	男	2016年、2017年参加（両方同じツアー）
A11-Y	大学4年	男	2017年参加
A12-Y	24歳、中学教師	女	2017年参加
B1	旅行会社勤務	男	
BC1	NGO職員兼小学校教師	男	小学校高学年担任
BC2	NGO職員兼小学校教師	男	小学校中学年担任
BC3	NGO職員兼小学校教師	男	小学校低学年担任

（筆者の調べによる）

1. カンボジアスタディツアーの概要

インタビューは、筆者が参加した2つのスタディツアー（ボランティア・プラットフォーム、ピース・イン・ツアーが主催したスタディツアー）の参加者、主催団体の関係者、受け入れている現地の人々におこなった。

(1) ボランティア・プラットフォームのカンボジアスタディツアー

ボランティア・プラットフォームによるカンボジアスタディツアーの概要は以下の通りである。テーマは「子どもと交流×孤児院×地雷×NGO」であり、孤児院等を訪問して子どもと交流すること、カンボジアにいまだに多く埋まっている地雷のことを学び、NGOの活動を視察するというのが目的である⁽¹¹⁾。ツアー期間は4～7日間から

選べる。そのうち最初と最後の2日間はほとんど移動のみである。宿泊先はシェムリアップという街の中のゲストハウスで、各部屋にシャワー、トイレ等もついているが、高級ホテルという感じではない。参加者はおおむね2人1部屋で宿泊する。

主な活動は以下の通りである⁽¹²⁾。1日目は主に移動で終わり、カンボジアについては、ゲストハウスに直行する。2日目は、現地のスタッフから活動の説明を受けるオリエンテーションを行った後に、ポル・ポトによる虐殺の現場となったキリングフィールドや、カンボジアにいまだに多く埋まったままとされている地雷のことや内戦のことを学べる地雷博物館、日本人カメラマンが中心となって建てたアンコール小児病院、伝統工芸復活と女性の職を増やすことを目的としてつくられたシルクファームの作業場などを訪問した。3日目は村の小学校に行き、子どもたちと話をするなどの交流をしたのち、リサイクル製品をつくっている現地のNGOを視察し、残りの時間はマーケットで買い物をした。4日目はベンメリア遺跡を観光したのちに、東南アジア最大の湖であるトンレサップ湖をクルーズし、水上生活の視察をおこない、夜にはカンボジアサーカスを鑑賞した。5日目には3日目とは別の村の小学校と、隣接している孤児院を訪問した。午後にはまた別の村の孤児院を訪れ、夜はカンボジアマッサージを体験した。6日目にはアンコール・トム、タ・プローム、アンコールワットといったアンコール遺跡群を巡ったのち、ツアー参加者で今回のツアーで学んだことなどを発表しあった。そして、夜に出国し、7日目に日本に到着した。以上の日程をまとめると、2・3・5日目は主に学んだり、交流したりしており、4・6日目は観光の要素が強かったといえる。

(2)ピース・イン・ツアーのカンボジアスタディツアー

株式会社ピース・イン・ツアーによるカンボジアスタディツアーの概要は以下の通りである。当ツアーのコース名は「カンボジア 村の小学校の子どもたちに体育を教える活動」であり、メインの活動は授業に体育のないカンボジアの小学校で運動会をおこない、体育を教えるというものである。ツアー期間は7日間であり、そのうち最初と最後の2日間はほとんど移動のみである。宿泊先はシェムリアップという街の中のホテルで、各部屋にシャワー、バス、トイレ等もついている、比較的に高級と分類されるホテルである。参加者はおおむね2人1部屋で宿泊する。

主な活動内容は以下の通りである⁽¹³⁾。1日目は成田国際空港もしくは関西国際空港

にそれぞれ集合してから出発する。成田国際空港にはピース・イン・ツアーの社員が添乗員として一緒に集合した。そして、乗り継ぎ地であるベトナムで全員集合し、待ち時間に自己紹介やメンバー同士の他己紹介をおこない、夜にカンボジアに到着した。2日目の午前には村のコテージへ移動し、そこで運動会でおこなう競技などについて説明を受けたのち、運動会を男子チームと女子チームに分けておこなうことになっていたため、2班に分かれて応援合戦の練習をしたり、オリジナルの準備体操を作ったりした。午後はホテルに戻り、運動会で子どもたちに配布する金メダルやトロフィー、玉入れで使う玉の製作をおこなった。ちなみに、金メダルは渡航前に10個以上作ってくるように指示されていた。その後、カンボジアの歴史について現地の日本人スタッフから説明を受ける座学の勉強の時間があった。夜はカンボジアの伝統舞踊アプサラダンスを鑑賞しながら夕食をとったのち、再びホテルで運動会の準備をおこなった。具体的には、運動会での役割決めや、応援合戦と準備体操の練習などである。3日目の午前には村の小学校訪問1日目であり、準備体操の指導や翌日におこなう運動会の競技をいくつか練習した。また、日本とカンボジアの互いの文化の紹介ということで、日本の相撲とカンボジアのマディンソン・ダンスという踊りを教え合った。午後は、地雷博物館とキリングフィールドの見学をし、夜はホテルにて再び応援合戦等の練習をおこない、翌日の運動会に備えた。4日目はメイン活動である運動会の開催である。運動会の種目は、かけっこ、ピンポン玉競争、障害物競走、ボール転がしリレー、カデ競争、騎馬戦、玉入れ、綱引きである。各競技数回ずつおこない1位の子どもにはメダルをプレゼントした。5日目は観光の1日でアンコール遺跡群を見て回った。そして、夕食の際には参加者全員でツアーの感想などを発表し合うさよならパーティがおこなわれた。6日目はトンレサップ湖クルーズを楽しんだ後、自由時間にマーケットで買い物などをし、夜に出国。7日目に帰国した。以上の日程をまとめると、2・3・4日目は主に学んだり、交流したりしており、5・6日目は観光の要素が強かったといえる。

2. スタディツアー参加者の声

スタディツアー参加者には主に以下の4つの質問を行った。

① スタディツアーへの参加の理由

- ② スタディツアーの良かった点
- ③ スタディツアーの悪かった点、改善点
- ④ ツアー参加前後の変化

まず、1つ目のスタディツアーへの参加の理由については、家族や友人などの身の回りの人が同じツアー、もしくは似たようなツアーやボランティアに参加したことに影響を受けたというのと、ボランティアがしたかったという意見が多かった。A6-Y、A10-Y、A12-Yは自分が参加する前に、家族や知人が全く同じツアーに参加し、おススメされたという。A3-Xは、姉がツアーに参加するというのを聞き、自分も参加したいと思って一緒に参加した。また、大学4年のA8-Yは卒業までの半年間に何かをしようと思ったときに友人がボランティアに行った話を聞いて影響を受けたという（以下カッコ内は筆者による補足、訂正）。

A8-Y「学生生活が（において）就活終わった半年間で、まあなんかやりたいなって思ってた、資格を勉強する（取得する）のか、英語をやる（勉強する）のか、他にインターンバイトやるか、海外に行くかっていうので迷ってたんだけど、なんか友達がインドにボランティアで行ったっていうのを聞いて、海外に行くのも卒業旅行以外に、そういうボランティアっていう形で行きたいなっていうのがあって（このツアーに参加した）」。

また、ボランティアや留学に興味があったA7-Yや、ボランティアなどの人の役に立つことがしたいというA11-Yは以下のように語る（以下カッコ内は筆者による補足）。

A7-Y「大学生活のうちにボランティアとか留学とかしたくて、その話を親にちょうどしてた時に、学校にフェア⁽¹⁴⁾でピース・イン・ツアーが来てて、まあいろんな会社がいるんですけど、その1つにピース・イン・ツアーがあって、目に留まったボランティアが、体を動かすのが好きだし、この体育を教えるツアーで、ほんとに（ボランティアや留学をしたいと）親に話してたその時だったから、なんか縁があるかもしれないと思って

応募しました」。

A 1・1－Y「今まで、自分のために留学とかインターンとか旅行とか、自分のために行くことばかりだったから、人のためにやりたいなって思って、ボランティアという形で、このツアーに参加して、その中でも体育っていうのも自分が好きだし、体動かすのも好きだし、あと子どもたちも好きだったから、そういう（自分が好きな）もので人の役に立ちたいなって思ってこのツアーに参加しました」。

以上の3名のツアーに参加した目的として、「ボランティア」に参加したいからというものが見受けられる。同じように「ボランティア」に参加したいという人は他にもいる。つまり、彼らは「スタディツアー」と「ボランティア」の区別がついていないということになる。

この一方で、A 1－XとA 2－Xの2人は長期のボランティアに興味があるからその前の準備やお試しとして参加したいという意見を述べていた（以下かつ内は筆者による補足）。

A 1－X「それは半年間（ボランティアに行きたいという気持ち）が元々あったんだよね。半年間っていうビジョンが元々あって、（中略）それでベトナムかカンボジアの2つ（のどちらに半年間行くかで迷ってた）だったんだよね。で、どっちも行って、準備期間じゃないけど、まずはその国を知ろうと思って、（それからボランティアに）行きたいと思ったからスタツア⁽¹⁵⁾（中略）行ったっていう感じだね。だから、スタツアに行きたいっていうよりは、半年行きたいから、その前の国選びをしたっていう（目的だった）」。

A 2－X「まず、スタディツアーじゃないほう…ってなんて言うんだっけ」。

筆者「ボランティア（のこと）？」

A 2－X「そう、ボランティアをしたいって思ってて（中略）何か現地の人、日本人じゃなくて違う文化の人と関わって生活してみたいって思ったの

が最初で、でも、なんだろう、「お試し」？みたいな。まずその長い期間で行くには、お金かかるし、行きたいなって思った時点では高校生で、高校生の時にチラシかネットで見て行きたいなって思って、でもお金ないから…。じゃあまずは大学生になって、まずは安いほう（スタディツアーを指す）⁽¹⁶⁾から行こう！みたいな。で、向こうの文化とかが合わなかったら、そもそも（ボランティアのほうの）村で生活も無理だろうしと思って、まずはお試しみたいな感じでスタツアに（参加した）。

以上の2名は、「スタディツアー」と「ボランティア」をはっきりと区別していた。このことより、スタディツアーとボランティアを同等に考えている人と、別物としてとらえている人の違いは、実際にスタディツアー以外にもボランティアに参加したことがあるかどうかという点にあると考えられる。A2-Xは、スタディツアー参加時、楽しかったし、学ぶこともあったけど、「これじゃない感」を感じていたらしい。そしてボランティアにも参加してみて、改めてスタディツアーとボランティアは違うものだと感じた。つまり、両方に参加することでその違いを感じられるのである。

また、前年も同じツアーに参加してもっとカンボジアについて知りたいと思った、A10-Yは以下のように語る（以下カッコ内は筆者による補足）。

A10-Y「去年（2016年）カンボジア行って興味を持って、もっとカンボジアについて知りたいと思ったから」。

筆者「去年も同じツアーに参加したじゃん？他のツアーに参加してみようとかはなかった？カンボジア以外とか」。

A10-Y「あー、それは思わなかったです。でも今（帰国後）思ってます」。

筆者「（笑い）やっぱ、まったく同じ内容よりかは違うのやってみたかった？」

A10-Y「そうそうそう、ちがうのがよかった。3回目は別のにします」。

筆者「どこらへんで、2回目も同じツアーじゃなくてよかったわって思った？全体的に？」

A10-Y「んーやっぱ前回のほうが楽しく感じました。感動と新鮮さと。やっぱ2回目は何でも知ってるから（感動が薄かった）」。

彼のように、まったく同じツアーに参加する場合、感動が薄れてしまい、得るものが1回目に比べて、2回目は少なくなってしまう。

また、自分の人生や生活に生かすための理由もいくつか見られた。例えば、A 9-Yが教師になりたいから海外の教育事情も知りたいと答えていたり、A 1 2-Yが自分の働き方にプラスになることをしたいなどと述べていたりした。

この、自分のためになることを望んでいる意見の中には、大学3年で就職活動が控えているA 6-Yの「就職活動で有利になるようにするため」というものもあった。彼女は以下のように語る（かっこ内は筆者による補足）。

A 6-Y「お姉ちゃんがこのツアーに3年前に参加して、すごい楽しかったって（言ってた）っていうのと、就職活動で面接でこの話をしたときに1人で何かに参加するっていうことがすごいいって、面接官にウケたよって（姉に）言われて、それで、もう就活（の時期）になるし、面接のそういうのにも材料になるし（中略）参加しようかなって（思った）」。

この「就職活動に役立つ」という文言はスタディツアーを主催するボランティア・プラットフォームも、ホームページにて以下のようにうたっている⁽¹⁷⁾。

カンボジアという国の歴史・現状・未来を学ぶことで、それが自分の生活とどのように繋がっているのかを考える機会が得られます。（中略）自分とは関係ないと思っていた事柄を自分と結び付けて考える力は就職活動にも役立つと思います。

就職活動のネタとして、「海外に行ってボランティアをしてきた話や留学していた話などが非常に役立つ」もしくは、「海外に行ったことがあるのが当たり前になってきているからどういう活動をしてどういうことを得たのかということが重要」と筆者も就職活動中、先輩や同じ就活生からよく聞いていた。A 6-Yの回答やボランティア・プラットフォームのうたい文句はそのような現代の就職活動状況をよく表している。

また、アンコールワットが見たいという意見も多くあったが、それはあくまで第2の理由であり、1番の理由として挙げる人はいなかった。

以上のように、観光も「ボランティア」も含んだスタディツアーのことをA4-Xは「いいとこ取り」のツアーと表現した（以下カッコ内は筆者による補足）。

A4-X「(ボランティア・プラットフォームの広告に惹かれるものがあったが、その惹かれるものとは)、プログラム自体がいいなって思って、1人参加もしやすいし、ボランティアにも携われて、観光もできてっていう『いいとこ取り』みたいな(笑)。」

以上の結果から、スタディツアーに参加する目的は、大きく分けて、周りの人の影響を受けたという意見、誰かの役に立つ「ボランティア」をしたいという意見、自分のためになることをしたいという意見、カンボジアに行った、もしくはカンボジアにこれから行くために、カンボジアについてより詳しく知りたいという意見に分けられる。そして、ほぼ全員に共通しているのが、アンコールワットを訪れたいという意見であった。

次に、2つ目のスタディツアーの良かった点については、カンボジアについて知ることができた点という意見が特に多かった。カンボジアの印象が変わったというA5-YとA6-Yは以下のように語る（以下カッコ内は筆者による補足）。

A5-Y「途上国今まで行ったことなく、それで途上国の人たちがちょっと怖いイメージはあったんですけど、それがやっぱ実際に行ってみて、関わったりしてみると全然怖くなくて、むしろ逆にすごい優しかった。それが(知れたということがツアーでよかったことの)1番です」。

A6-Y「参加者にカンボジアの良さを最大限伝えてくれるところがいいなって(思う)。(中略)参加者みんながカンボジアについての考えが変わったと思うから、(カンボジアについての印象が)悪い面になった人はいないと思うから、そういう部分はいいなって思う」。

また、A11-Yは、2日目にあった座学のカンボジアの歴史について学ぶ時間のことに関してこう語る（以下カッコ内は筆者による補足）。

A 1 1 - Y 「絶対必要だったと思う。カンボジアを知ってそういうの（交流や支援）をするべきだし、それを知らずにやるのはやっぱ偽善者かなあと
思うし」。

以上のように、スタディツアーを通して、カンボジアの良さであったり、歴史的な部分であったりを学べたのを良かったと感じる人は多かった。

その一方で、カンボジアに行ったことで、日本の良さや自分の恵まれた環境に気づけたのが良かったと答える人もいた。A 4 - XやA 8 - Yは以下のように語った（以下カッコ内は筆者による補足）。

A 4 - X 「1 番はすごい自分の身の周りの環境がどれだけ恵まれているのかっていうのをすごく気づかされて、自分自身初めての1 人海外⁽¹⁸⁾とかだったから、プログラムとしてはみんな（同じツアーの参加者）がいたけど、なんだろう、気持ち的に1 人だったから、そういう意味ではすごく不安だったし、出発前には心折れそうになったんだけど（笑）、周りの人の温かさとかすごい感じたし、こんなに恵まれた環境なのに文句言ってもらえないなと思った。あと、やっぱり日本の文化って素晴らしいなって思ったし、海外に行ったからこそ日本の良さに気づけた部分もあったから（よかった）」。

A 8 - Y 「カンボジアっていう発展途上国に行ったことがなかったので、日本とのギャップをすごい感じましたし、暮らしだったり、衣食住もそうだし、学校だったり、生きてきた環境だったり、全然違って本当に自分がいかに今の生活を当たり前に思っていたかっていうのを痛感させられましたね。そこが知れたのが良かった」。

A 4 - Xのように、A 2 - XやA 1 2 - Yもまた、一緒に参加したメンバーが良かったと答えており、A 1 2 - Yはこう語る（以下カッコ内は筆者による補足）。

A12-Y「見知らぬ人たち（初めて会う同じツアーの参加者たち）と体操を作り上げてきたりだとか、そういうのもコミュニケーション能力だったりだとかにつながっていったかな。っていうのが意外な（良かった）ところだったかな」。

筆者「最初はこんなに一緒に行く日本人とコミュニケーションをととは思ってなかった？」

A12-Y「そうそうそうそう。そう思ってなくて、子どもと接していく中で成長できたらいいなって思ってたんだけど、それプラス、参加者との関わり合いとかすごい良かったなって思った」。

また、子どもたちと実際に触れ合えたことが良かったし、それを通して言葉の壁は越えられることを実感できたのが良かったと答える人や、自分の生き方や感覚を見つめ直せたのが良かったという人も多かった。A8-Yはこう語る（以下カッコ内は筆者による補足）。

A8-Y「良かったのは、やっぱり子どもたちと触れ合えたのが1番心に残っているし、（クメール語は）全然挨拶しかできないけど、自分が盛り上げたりするだけで意思疎通ができるし、相手もすごい喜んでくれたっていうのがすごく嬉しかったので、まあそういう経験ができたこと（が良かった）かな」。

その他には、A2-Xは様々な遺跡の観光ができたのも良かったと述べていた。

以上の結果から、スタディツアーの良い点は「学ぶ」という意味で得ることが多いというところにあると考えられる。カンボジアについて学び、実際に現地の人と触れ合うことで気づくことがあり、また、日本とカンボジアの違いを知ることによって己の考え方を見直すことができる。様々な良い点があるが、すべては「学ぶ」というところにつながっている。また、その他には、参加者同士の関わり合いや、観光を良かったという参加者もいる。

次に、3つ目のスタディツアーの悪かった点、改善点に関しては、子どもたちとの交流の時間がもっと欲しかったという意見が圧倒的に多かった。他の時間を削ってもいいから子どもたちと交流したいという人が多い。どの時間なら削ってもいいか尋ね

ると、買い物などの自由時間を削りたいというひが多かったが、アンコールワットに行かなくてもよいという人はほとんどいなかった。代表的な例として、A12-Yは以下のように語る（以下カッコ内は筆者による補足）。

A12-Y「子どもたち（との交流）の時間が少なかったかな。気持ちとしては、子どもたち（との交流）の時間が少ないけど観光とかそれ以外のことが多かったかなと思うそれちょっと削っても良かったかな、という感じ」。

筆者「じゃあもし、（交流以外の活動の中で）削るとしたら、どこを削ってもいいかなと思う？」

A12-Y「うーん…でもアンコールワットは行きたかったから（笑）、うーん（削るとしたら）自由行動かな…」。

このような意見が多い中、人気の世界遺産アンコールワットを削ってでも、交流をしたかったという人も1人だけいた。それがA11-Yである（以下カッコ内は筆者による説明）。

A11-Y「アンコールワットには興味はあった。でも、あれ（アンコールワット）に行くくらいなら、交流がしたかった」。

以上のように、子どもともっと交流したいと意見が非常に多数を占めた。また、ツアー中体調を崩したA11-Yはスケジュールがハードすぎると述べていた。

つまり、スタディツアーの問題点の1つ目として、「内容に対する日程の短さ」が挙げられる。短い時間で多くのことを学ぶために、ハードなスケジュールになりがちで、それぞれの活動が少しずつになってしまうため、日程自体を長くすることで、スケジュールの過密さを緩和することもでき、交流の時間を増やすことが可能になるかもしれない。しかし、子どもたちとの交流の時間に関しては、カンボジア教育省による制限があるため、何度も同じ学校を訪問することは難しいという問題点がある⁽¹⁹⁾。また、日程自体が長くなると必然的にツアーの値段も上がってしまい、確保すべき日にちが長くなるために参加しづらくなる人も出てくる。そのため、日程を変更することは難

しい。

また、A 9－Yからの子どもたちとの交流の際に現地の言葉であるクメール語を知らないがために話をできない場面があったから、もう少しクメール語を学ぶ必要があったという意見があった他、参加者内での意識の差によって見学態度が変わってくるという意見もあった。2つめの質問である「スタディツアーの良かった点」のときに出了た集団Yの歴史の勉強が良かったという意見に反し、歴史の勉強中に寝ている参加者がいたことや、観光中に現地ガイドが様々な解説をしていますが、それをあまり聞いていない参加者がいたことは、この意識の差からきているのだろう。参加者の意識に差があることについて、半年間ボランティアとして現地に入り込み、何度もスタディツアー参加者の見学の姿を見てきたA 1－Xはこう語る。

A 1－X「(スタディツアーの悪い点として挙げられるのが) 参加してる人たちの意識の差。それによってやっぱりその子どもたちの影響が…。スタツアとして参加してる人の意識の差で、やっぱりその関わり方とか見学の仕方とか、授業の参加の仕方とかが変わるから。そうすると現地の子どもたちにとってこれはどうなんだろうかっていうのはたしかにあるな…」。

詳しくは第3章4節にて後述するが、この意識の差が現地の小学校教員を困らせるような事態も招いている。現地に興味がなさそうに見える態度は、ツアーを受け入れてくれている現地の人に悪い印象を与える上、弊害も生むのである。

最後に、4つ目のツアー参加前後の参加者の意識や行動の変化については、主に4つの回答にまとめられる。1つ目は「途上国により興味が出た」という意見で、ほとんどの人がまた同じようなツアー、もしくはボランティアに参加したいと述べていた。また、A 5－Yは、それだけではなく、就職先の候補の1つに途上国に貢献できるような仕事を入れたいとも述べていた（以下カッコ内は筆者による補足）。

A 5－Y「(ツアーの参加前後で自分自身に変化が) ありましたね。もっと発展途上国に行って、カンボジアだけじゃないじゃないですか、途上国って。だからもっとそのいろんな(発展途上)国に行って、現実を見て行きたい」。

筆者「じゃあ、現実を見て、その後どうしたいとかある？」

A5-Y「現実見て自分がいま日本にいる恵まれた環境をもう1回考え直したい。

で、欲を言えば、その発展途上国に行ってなんか仕事を将来できたらいいなってちょっと考え始めました」。

筆者「おお！それは途上国に『行って』働きたいんだ？」

A5-Y「そうですね。今まで（ツアーに参加するまで）は全く（途上国で働きたいということを）考えてなかったんですけど」。

2つ目はカンボジアへの印象が変わったという意見で、「貧しい」というマイナスのイメージが、ツアーに参加したことで「幸せそう」「明るい」などというようなプラスのイメージが変わったという。A6-YやA7-Yは以下のように語る（以下カッコ内は筆者による補足）。

A6-Y「（イメージが）変わったことは、日本よりカンボジアの人のほうが生きてて幸せそうだなって思って、だからそういう部分で、やっぱり貧民でもうらやましいと思うようになった」。

A7-Y「カンボジアは『貧しい国』っていう大体のイメージだったんだけど、行ってみて、貧しさとかあんまり感じなかった。みんな本当に幸せそうだったし、みんな笑顔で過ごしてて」。

そして、3つ目の回答は、「日本にしながらできる支援をしたい」、もしくは「するようになった」という意見である。スタディツアーの参加から本稿のインタビューを受けるまでの間に2年半ほど経っているA3-Xは、ツアー参加前にはしていなかった募金等を実際にするようになったという（以下カッコ内は筆者による補足）。

A3-X「（ツアー参加後に行動で変わったことといたら）コンビニの募金箱におつり入れるくらい（笑）。」

筆者「それってさ、コンビニの募金箱におつり入れるってさ、ツアーに行ってからするようになった？」

A 3-X「うん。(ツアーの参加)前はさ、恥ずかしいじゃないけど、なんか怖かったの。(中略)でも、今の自分にできることってこれくらいかなって(思ってた募金している)。まあ、本当にちょっとのお金だけだね」。

また、A 8-Yは、他のボランティア等に参加するだけではなく、日本にしながらできることを今後積極的にやっていきたいと語る(以下カッコ内は筆者による補足)。

A 8-Y「ユニクロとかで服の募金じゃないけど集めたりやってるじゃん⁽²⁰⁾?そういうのを積極的にやりたいなって思いましたね。あとは、お母さんが、ベトナムの家族と手紙交換っていうのをずっとやってて。ボランティア?みたいなやつ。今回行ってからその重要さというか、ずっとつながっていくことの大切さというか(に気づいて)、すごい良いことやってたんだなって思いましたね」。

4つ目は、質問の2つ目である「スタディツアーの良かった点」とかぶる内容となっているが、「自分に与えられた環境がいかに恵まれていたか気づいた」という意見、そして「それを見直していきたい」という意見が挙がった。A 8-Yは、何かしら途上国に支援をしたいと考えるが、その前にやるべきことがあると、上記の意見に続けてこう語った(以下カッコ内は筆者による補足)。

A 8-Y「でも逆に、そこ(支援すること)ばかり見てもいけないなっていうのもすごい思った。途上国の(支援の)前にまず自分の無駄にしてるもの(中略)、ノートを捨てたりとか、(まだ使えるけど)鉛筆はもういらないや、シャーペンあるし、とかそういうのが多いから、そっち(途上国)の支援もだけど、まず自分の暮らしの(中で)余分なものをすぐ捨てる(という)考えをやめましょうって思った」。

以上の他には、ツアーの参加前には「自分が途上国のためにできることはない」と思っていたが、「見て知ったことを伝えるのも大事なことだと気付いた」という意見がA 2-Xから出た(以下カッコ内は筆者による補足)。

A 2-X「行く前は、行ってどうなるのかなみたいな。何もできない、技術とかも何もない私がただ見に行ったところで何になるのかなと思ったけど、行ってるときとか行った後とかは、『カンボジアってどんなところだったんだよ』っていう話を日本でするのが役目というか、なんだろうな、その話をするだけでも興味持ってもらえたりとか、『行ってみたいね』、『いいね』って思ってくれる人が増えるといいのかなって（思うようになった）」。

また、歴史の暗い面を初めて知ったが、それはカンボジアを知る上では必要不可欠な情報であるため、みんなにもきちんと知ってほしいと思うようになったとA 4-Xは述べていた。

ここまで述べてきた2節のインタビュー結果を踏まえ、スタディツアーは解決すべき課題点もいくつかあるが、様々な気づきや学びを与える場であり、別のツアーやボランティア等に興味を持たせるきっかけになっているということが分かる。

3. スタディツアー主催団体関係者の声

今回インタビューを行ったB 1はピース・イン・ツアーの社員であり、添乗員として何度もカンボジアに行っている人物である。スタディツアーの主催団体関係者には以下の4つの質問を行った。

- ① スタディツアーをおこなう目的
- ② スタディツアーの改善点
- ③ スタディツアーを受け入れてくれる現地の方の反応
- ④ スタディツアーのリピーターは多いのか

まず、1つ目のスタディツアーをおこなう目的に関しては、会社が掲げている目的と、B 1の方が個人的に感じている目的の2つを伺った。会社が掲げている目的としては、ただの観光旅行ではなく、平和につながる旅行をおこなうことであるとのことで、以下のように語っていた（以下カッコ内筆者補足）。

B 1 「会社がもともとの理念でただの旅行ではなくて、平和につながる旅行というか、他の様々な国の平和に貢献できる旅をやろうっていうのが会社の理念としてあるんですね。で、それが、(会社の) 名前がピース・イン・ツアーってのにも表れているんですけども。ただ単に一般的な観光をしてお金を落としていくだけではなくて、まず現地の歴史とか社会的な背景とかそういったことをちゃんと学んだ上で、その国に何ができるか考えていこうっていうのを織り込んだ旅行をやっていききたいなっていうのがうちの会社なんですよ。だから、スタディツアーをやるっていうのはうちの会社にとっては当然の流れであって、うちの会社が目指すところっていうのはひとつの形としてスタディツアーっていうのは、なんていうのかな、やるべき使命みたいな感じなのかなって思ってますね」。

次に、B 1 が個人的に感じているスタディツアーをおこなう目的に関しては、一般的な観光旅行ではできない現地の人と接することを通して、その国の人の生活や思い、何をしたいと何ができないのかということ「知る」という部分が大きいと述べていた。また、スタディツアーの位置づけを以下のように語っていた。

B 1 「何か貢献とかボランティア活動とか支援とか、いろいろやりたい人はいっぱいいると思うんですけども、やっぱりまずは知ることですよ。その国のことをちゃんと知って本当に必要な支援っていうのは何なのかとか、またはそのやり方が適切なのかどうかとか、そういった点を知る上でも、スタディツアーは最初の一步として重要なんじゃないかなと思ってますね」。

筆者「じゃあやっぱり、ボランティアとかとはちょっと違うけどその前にいろいろ知ったりとかする段階みたいな感じですかね」。

B 1 「そうですね、まあそういう段階が支援とかボランティアとかそういうのの前に絶対必要だとは思ってますよね」。

このように、B 1 はスタディツアーをボランティア等の支援活動の一步前の現地を知るための活動であると捉えていた。これはつまり、スタディツアーとボランティア(支援活動)を別物と考えているということである。

以上の企業が掲げる目的とB1個人が感じる目的をまとめると、スタディツアーをおこなう一番の目的は「知る」という点にある。支援の一步前の段階として「知る」ということを重視しているのである。そして、その先に現地の役に立つ支援をおこなうという目的も見えている。つまり、どちらかという、ツアー参加者に何かを体験させたいということよりも、現地のために現地のことを知ってほしいという気持ちが表れていると考えられる。

次に、2つ目のスタディツアーの改善点としては、スタディツアーで訪問した先にモノをあげる行為を極力なくしていき、体験・活動を通して技術などをあげられるようにしていくべきだということを述べていた。寄付はもちろん現地の人にとってありがたいことではあるが、そればかりでは、「モノをくれる人」と勘違いされてしまうこともある。しかし、そうではなく、行く側としては活動を通して何かを得てほしいという気持ちで行っているため、その認識の差が生まれないようにするべきであるとのことだった。実際に、2017年の秋頃に、現地の人が日本からツアーを行っている団体に対し、モノをリクエストして揉めるというトラブルがあったそうだ。それによりカンボジア教育省の制限が強まって、外国の人が現地の小学校を訪問することが以前よりも厳しくなった。

次に、3つ目のスタディツアーを受け入れてくれる現地の人々の反応に関しては、大多数が喜んでもらえるという回答であった。ピース・イン・ツアーがおこなうツアーでは、基本的に同じ学校に2回以上行くことがないようにしているため、どの学校も新鮮味を感じ、非常に喜んでくれるという。しかし、例外的に、ツアー参加者からの希望があった場合、同じメンバーで同じ学校を訪問する再訪ツアーをおこなうこともある。その際の活動内容は主に参加者が決めるが、それが微妙な反応をされることもある。例えば、非常に熱心な参加者の1人がみんなで大縄跳びをやろうと提案し、それを現地の先生方に説明するのにパワーポイントも用意してプレゼンをした時のことである。その人はそのプレゼンを、現地の先生方が日本語よりも英語を理解できると思い、英語でおこなったが、現地の先生の英語力には差があるために、理解できる人とあまりできない人がでてきてしまった。その結果、大縄跳びに関していまいち理解できず、あまり楽しめていなかったそうだ。もし、英語ではなく日本語で説明していれば、日本語と現地語のクメール語がわかるガイドが通訳をしてすべての先生に等しく説明することができたという。

最後に、4つ目のスタディツアーのリピーターは多いのかについてである。明確な数字で示すことはできないが、リピーターは一定数いるようである。しかし、同じ国のツアーに参加するよりも違う国のツアーを選ぶ人が多い。また、前述した再訪ツアーもよくおこなわれているらしい。再訪ツアーが催行される理由としては、参加者たちが、また同じ子どもに会いたい、前回のツアー後にその学校がどのように変化したのか知りたいなどと考えるためである。違う国のツアーに参加する理由は、第3章4節のスタディツアーの参加前後の変化の質問のところで見られた、途上国に興味をわいたという答えにあると考えられる。カンボジアのツアーに参加することで途上国に興味を持ち、もっと他の国にも行ってみたいと考えるようになったということである。以上のように、現地を再び訪れたり、違う途上国を訪れたりする人が一定数いるということとはしかである。

4. スタディツアーを受け入れる現地の関係者の声

まず、インタビューをおこなった現地の小学校教員3人は、日本のNGO団体であるボランティア・プラットフォームの職員でもあるが、今回は受け入れ側としてインタビューに協力してもらった。

3人が勤める小学校はボランティア・プラットフォームが運営していて、シェムリアップという都市部から車で1時間ほどのトンレアップ村というところに存在する。この小学校は、スタディツアーだけではなく、ボランティアも受け入れており、同団体を通じてボランティアに応募した人々が日本から赴き、そこで授業をおこなうこともある。特に大学の夏休みや春休みの期間には30人ほどのボランティア参加者がその村に滞在し、授業に参加する⁽¹⁰⁾。一方で、スタディツアー参加者は4～7日間のツアー期間中の内の1日に、この小学校の授業を見学したのち、BC3から小学校や隣接する孤児院の説明を受け、子どもたちと交流する。

以上のような状況下にあるため、現地の小学校教員は日常会話程度の日本語を問題なく話せる。そのため、インタビューは簡単な言葉を使いながら日本語でおこなった。本節に何度かインタビューの会話内容を載せるが、彼らの日本語が多少間違っていてそのまま記載し、かっこにて筆者が正しく訂正している。彼らには以下の3つの質問をおこなった。

- ① 日本人がカンボジアに来るのをどう思うのか。
- ② 日本人が来ることによって嬉しいことはあるのか。
- ③ 日本人が来ることによって困ることはあるのか。

まず、1つ目の日本人がカンボジアに来るのをどう思うのか、という質問に対しては、3人ともとても嬉しいし楽しいと答えていた。また、インタビューという形をとったわけではないが、現地の小学生にも同じことを聞いてみたところ、「嬉しい」、「楽しい」と答える子が多かった。しかし、一部には「日本人は嘘つき、嫌い」と答える子どももいた。具体的には教えてもらえなかったが、他の言動から推測すると、仲良くしても結局自国に喜んで帰っていつてしまうのを薄情に感じているようであった。

多くの人が喜ぶ理由は、次の「日本人が来ることによって嬉しいことはあるのか」という質問から知ることができる。この質問に対しては、単純に楽しい、日本語を覚えられて嬉しい、子どもと遊んでくれるから子どもたちが嬉しそうなどの意見があった。日本に留学したいと思っていて日本語を熱心に勉強しているBC3は以下のように語る（以下カッコ内は筆者による補足と解説）。

筆者「日本人が来てくれるのは嬉しいですか」。

BC3「うん、嬉しいよ（食い気味に回答）」。

筆者「なんで嬉しい？楽しい？」

BC3「楽しくて、いっぱい日本語を使っているから」。

筆者「ああ、日本語の勉強ができる（ということ）？」

BC3「そうそうそう（食い気味に回答）」。

以上のように、嬉しさがよく伝わってくるほど食い気味に語っていた彼は、筆者がボランティアとしてその村に滞在しているときも熱心に日本語の問題集を解いていた。日本に出稼ぎに行きたいというBC2も同じように、日本語の勉強ができるのがありがたいと話していた。

また、「日本人が来てくれる＝自分たちの仕事があるということだから、日本人が来なかったら失業してしまうし、日本人がたくさん来てくれるとお給料が上がるかもしれない」とBC1は述べていた。

さらに、BC2は、スタディツアーの参加者が来ることで、子どもたちの関心がそちらに向いてしまい、授業に集中しなくなることを憂慮するものの、参加者が授業を見てボランティアにも興味を持ってくれる可能性があるため、授業を見てもらうのはよいことだと話す（以下かっこ内は筆者による補足や訂正）。

BC2「スタディツアーの（人に）授業を見らせる（見せる）のはなんかいいと思います。なんかみんな（＝スタディツアー参加者）（が授業を）見て、授業のやり方分かったらみんなここにまた（ボランティアとして）来たいと思って（くれると思う）」。

以上のように、彼らにとってボランティアが来てくれることは嬉しいことであり、スタディツアーをきっかけにボランティアにも興味を持ってくれる人がいるかもしれないということは喜ばしいことであるようだ。

しかし、前述した通り、現地の教員たちは、スタディツアー参加者が来ることによって、子どもたちが授業に集中しなくなることに困ってもある。これは最後の「日本人が来ることで困ることはあるのか」という質問に対して出てきた答えである。日本人が来ることで困ることが「ある」と答えたのは、中学年の担当であるBC2と低学年担当であるBC3である。2人は気まずそうに以下のように語る（以下かっこ内は筆者による補足、訂正）。

BC2「（スタディツアーの人が見に来ると）みんな友達と遊んだり、みんな授業あんまりしない（聞かない）。ちょっと…困ってる」。

BC3「（スタディツアーの人が見に来ると子どもたちが）なんかあんまり授業見ない」。

筆者 「それは困る？」

BC3「まあ、うん。ちょっとね。（スタディツアー参加者が）見学の時写真を撮ったり、それはちょっと困ってますね」。

しかし、2人ともそれよりも日本人が来て学校などの現状を知ってくれたり、ボラ

ンティアに興味を持ってくれたりするのが嬉しいという気持ちのほうが大きいらしく、授業がやりづらくなるのはしょうがないと言っていた。

以上のように、現地の人々はスタディツアーの人が来ることで多少困ることもあるが、興味を持って来てくれ、ボランティアに参加してくれる可能性が出ることはとても喜んでいるということが分かる。しかし、3人とも、スタディツアーで来るよりボランティアで来てくれるほうが嬉しいとも話していた。

第4章 結論

本稿は、負のインパクトがあるのにも関わらず、スタディツアーがなぜ多く催行されているのか、スタディツアーの国際協力という観点から見た場合の役割は何なのかを明らかにし、今後の展望について言及することを目的としていた。

第2章では、スタディツアーの定義と、マス・ツーリズム批判の流れからスタディツアーが誕生したことに触れ、スタディツアーの正のインパクトと負のインパクトを書き出した。その中でも、スタディツアーの参加者にとっては正のインパクトが多く、受け入れ側には負のインパクトが多かった。

第3章では、カンボジアでのスタディツアーに携わる人々にインタビューをおこなった。その結果、参加者たちはスタディツアーに、ボランティア的要素、観光的要素（特にアンコールワット）、自らの学び・成長などを求めて参加していた。そして、ほとんどの参加者は実際にすべてかなえられていると感じている。特に3つ目の自らの学び・成長はほとんどの人が求めている。その一方で、主催団体や受け入れ側は、参加者が現地のことを学んで知ること、そして次段階としてボランティア等の支援活動につながってくれることを期待しているようであった。そして参加者でこのようなツアーやボランティアに再び参加したい、途上国に興味が出たと答える人は多かった。しかし、実際に再び訪れている人はそう多くはないという結果が出ている。途上国に深い関心を持って現地に入った人でも、現地の人々と共にいるときは心から彼らを何らかの形で支援しようと思いつつながら、帰国後、日が経つにつれて当初の鮮やかな印象が薄れ、行動が鈍りがちになるということになりかねないし、むしろ、そういう場合のほうが多いかもしれないと鈴木はいう[鈴木 1987:9]。もちろんこの結果は、多くのインタビュー対象者が一度途上国を訪れてから日がそれほど空いていないせいもあるかもしれない。しかし、スタディツアーから帰国後も実際に積極的に支援活動等に携わっているという例はほとんど見られなかった。A1-XやA2-Xはツアー参加に長期ボランティアに参加したが、これはツアー参加前から検討していたことで、スタディツアーの影響とは考えにくい。

また、その他には、受け入れ側に多少の負のインパクトはありつつも、参加者を歓迎する気持ちも非常に大きいことが感じられた。

以上のような調査結果を踏まえ、スタディツアーが多く催行される理由とスタディツアーの国際協力における役割について考察する。スタディツアーは参加者からすると、様々なものを得られ、観光もでき、就職活動にも生かせるもので、A4-Xの言葉を借りると「いいとこ取り」なツアーとなっている。またその後のボランティア活動等につながることを期待している主催団体や、受け入れ側にとっても必要なものであり、3者の需要が一致している。以上のような理由から、スタディツアーは多く催行されている。そして、国際協力という面から見た場合のスタディツアーの役割は、「きっかけ」である。スタディツアーに来ることでボランティア等の支援に興味を持ってもらい、支援を増やしていくことにつなげる、つまり国際協力の「きっかけ」という存在である。例えば、A5-Yはスタディツアーへの参加を「きっかけに」途上国に貢献できる職業にも興味を持つようになった。これは3者にとってのスタディツアーの理想の形であろう。しかし、果たしてスタディツアーの「きっかけ」としての役割は本当に機能しているのだろうか。

まず、参加者がスタディツアーに求めるのは、現地のことを知り、その先に「自分のためになること」である。一方で、主催団体・受け入れ側がスタディツアーをおこなう目的は、現地のことを知ってもらうことで、その先には「現地の支援につながることを」期待している。この参加者の求める「自分のためになること」が例えば、ボランティアをしたかったから現地の情報を知れたのが自分のためになった、就職先や進路で悩んでいたけれども、現地のことを知り途上国に興味が出たため進路をそのようにしたい、などであれば、「現地の支援につながることにイコールとなるため、「きっかけ」としての役割を果たしているといえよう。しかし、この「自分のためになること」と「現地の支援につながることに必ずしもイコールとならない。イコールとならない「自分のためになること」の例としては、就職活動で有利になった、などが挙げられる。もちろん、主催団体・受け入れ側もスタディツアー参加者が100%「現地の支援につながることを」おこなうようになるとは考えていなく、そのような人もいるかもしれない、というように語っていた。しかし、第2章2節にもある通り、高柳・馬橋によると、事前学習や事後学習もなく、「お固い」レクチャーや「学習支援」もないツアーが増えてきていることにより、必ずしもNGO活動に共感や関心を持たない、自己本位の参加者も増えているのである〔藤原・栗山 2014:45-47〕。事前学習等がないことは、参加のしやすさ、つまり「気軽さ」を生んでいるが、それにより、ツ

アーに向き合う「気持ちの重さ」までもが軽い人も増やしているのだろう。ツアー中に、受け入れ側に対する失礼な態度をとる人がいるのもこのようなことが一因となっているのかもしれない。これではツアーの質が下がってしまい、主催団体や受け入れ側の期待しているボランティア等の国際協力に興味を持ってもらうことがかなわなくなってしまうかもしれない。たくさんの人に興味を持ってもらうためにある程度の気軽さは必要であるが、そのために、本来期待していた部分につなげることができなくては意味がない。スタディツアーは、たくさんの集客をし、参加者に様々なことを得てもらい、新しい「観光」という意味では成功しているかもしれないが、「国際協力」という文脈の中では、「きっかけ」としての力を発揮しているとはいえないのである。

今後のスタディツアーの進む先まで本稿では述べられなかったが、いかにして、スタディツアーが国際協力の「きっかけ」としての力を取り戻すのか、もしくは観光としての力をより強めていくのか、はたまた全く違った新しい要素を取り入れていくか、今後のスタディツアーにも注目していきたい。

注

- (1)筆者が Google Chrome にて「スタディツアー」と検索して出てきた結果のうち、スタディツアーを募集中もしくは募集終了はしているが最近でも活動している団体のサイトを上から順に 40 件調べた結果である（2017 年 11 月 28 日参照）。
- (2)CAMBODIA BUSINESS PARTNERS ホームページ <http://business-partners.asia/cambodia/roudou-20171008-salary/>（2018 年 1 月 3 日参照）より。
- (3)楽天トラベルホームページ <https://travel.rakuten.co.jp/mytrip/ranking/world-heritage-world/>（2017 年 12 月 30 日参照）より。「一生に一度は行ってほしい！本当に行ってよかった海外の世界遺産ランキング TOP20」でアンコールが 2 位。
Dolift ホームページ <https://dlift.jp/worldheritage/ranking>（2017 年 12 月 30 日参照）より。「世界の絶景！世界遺産ランキング」でアンコール遺跡群が 1 位。
- (4)スタディツアー研究会ホームページ <https://starken1997.jimdo.com/>（2017 年 11 月 30 日参照）より。
- (5)開発教育協議会とは、国際協力 NGO や国連関係団体、地域の市民団体など約 50 の民間団体と約 700 名の個人で構成される教育 NGO のことであり、1982 年に発足して以来、開発教育と呼ばれる国際理解や国際協力をテーマとした教育活動や参加型学習の普及推進をおこなっている団体である。
開発教育協議会ホームページ <http://www.dear.or.jp/>（2018 年 1 月 15 日参照）より。
- (6)鈴木が開発教育協議会機関誌『開発教育』の編集部所属という情報は、1987 年に発行された『開発教育』11 号時点のものである。
- (7)引用中のスタディー・ツアーと本稿のスタディツアーは同じものである。
- (8)藤原孝章は、同志社女子大学現代社会学部現代こども学科の教授であり、社会科教育、国際理解教育、グローバル教育といった分野について研究している。
- (9)JICA の NGO コーディネーターとは、日本の NGO が開発途上国の現場で国際協力活動をおこなう際の支援と、NGO と JICA の連携促進をおこなうコーディネーターのことを指す。
JICA ホームページ
<https://www.jica.go.jp/india/office/information/event/2009/091106.html>（2018 年 1 月 15

日参照)より。

(10)筆者も2016年に16日間、2017年に14日間、ボランティアとしてこの村に滞在していた。

(11)ボランティア・プラットフォームホームページ <http://volunteer-platform.org/internship/cambodia2-4-7plan/> (2018年1月15日参照)より。

(12)活動内容は筆者が参加した2015年9月時点のものであり、筆者は7日間のコースに参加した。

(13)活動内容は筆者が参加した2017年9月時点のものである。

(14)ここで登場する「フェア」とは、A7-Yが所属する青山学院大学にて2017年6月におこなわれた「全国 NGO スタディツアーフェスタ 2017 海外ボランティア合同説明会」のことを指す。NGOや旅行会社など15団体がこのイベントに参加し、夏におこなう予定のボランティアやスタディツアーなどを紹介したという。大学プレスセンター記事 <https://www.u-presscenter.jp/2017/05/post-37358.html> (2018年1月15日参照)より。

(15)「スタツア」とは、「スタディツアー」を省略したもので、今後本稿に登場する「スタツア」もすべて「スタディツアー」を指す。

(16)A-2Xは、スタディツアーを長期ボランティアと比較して日数が短いために「安い」と表現している。しかし、実際に安いかどうかは選ぶ団体や日数、時期などで変化するため、一概にボランティアよりスタディツアーが安いとはいえない。

(17)ボランティア・プラットフォームホームページのカンボジアスタディツアーの募集ページ <http://volunteer-platform.org/internship/cambodia2-4-7plan/> (2018年1月15日参照)より。

(18)スタディツアーは団体で行ったが、A4-Xは1人で応募し、初めて会う人たちとツアーに行ったため、「1人海外」と表現している。

(19)外国人がカンボジアの小学校を訪れるためには、カンボジア教育省の許可が必要で、基本的には丸1日訪問するのが限界である。筆者を含めたピース・イン・ツアーのスタディツアー参加者が2日間小学校を訪問することができたのは、ピース・イン・ツアーのアンコール社(カンボジアに存在)とカンボジア教育省との長年に渡る信頼関係があってこそ成り立つものであるとのことだった。以上の話はイ

インタビュー対象者 B1 から伺った話である。

- (20) A8-Y が言う、ユニクロの服を集めている活動とは、「全商品リサイクル運動」のことを指す。これは、全国のユニクロ・ジーユーで買って着なくなったものを店舗で回収をおこない、リユースもしくはリサイクルし、世界中の服を必要としている全ての人へ届ける活動である。ユニクロホームページ
<http://www.uniqlo.com/jp/sustainability/refugees/recycle/> (2018 年 1 月 15 日参照) より。

参考文献

東徹

- 1999 「マス・ツーリズム批判と新たな観光のあり方の模索」塚本圭一・東徹編、
『持続可能な観光と地域発展へのアプローチ』pp.3-11、泉文堂。

藤原孝章

- 2014 「特定課題研究プロジェクトについて」『国際理解教育』20:36-41。

藤原孝章・栗山丈弘

- 2014 「スタディツアーにおけるプログラムづくりー「歩く旅」から「学ぶ旅」への
転換ー」『国際理解教育』20:42-50。

藤山一郎

- 2011 「海外体験学習による社会的インパクトー大学教育におけるサービスラーニ
ングと国際協力活動ー」『立命館高等教育研究』11:117-130。

市原芳夫

- 2004 『スタディ・ツアーのすすめ』岩波書店。

三好亜矢子

- 2001 「カンボジアの「村人立」小学校建設」若井晋・三好亜矢子・生江明・池住
義憲編、『学び・未来・NGOーNGOに携わるとは何か』新評論。

永井浩

- 1994 『カンボジアの苦悩』勁草書房。

オPPERマン、M・チョン、K.S

- 1999 『途上国観光論』内藤嘉昭訳、学文社。(M.Opperman &
K.S.Chon,1997,*Tourism In Developing Countries*. International Thomson Business
Press.)

世界観光機関

- 2017 「Tourism Highlights 2017 Edition 日本語版」世界観光機関。

鈴木美奈子

- 1987 「「もう1つの旅」をめぐる」『開発教育ー21世紀の教育を考えるー』
11:3-12。

高寺奎一郎

2004 『貧困克服のためのツーリズム Pro-Pour Tourism』古今書院。

高橋優子

2008 「スタディツアーの教育的意義と課題—JICA カンボジア事務所での経験に基づいて—」『筑波学院大学紀要』3:149-158。

高柳彰夫・馬橋憲男

2007 「拡大する NGO・市民社会の役割」『グローバル問題と NGO・市民社会』pp.10-25、明石書店。

田中博

2001 「スタディツアーの現状と課題」『開発教育—公正な地球社会のための教育—』44:4-9。

山中速人

2001 「オルタナティブツーリズムとしてのスタディツアー—その現状と課題」『開発教育—公正な地球社会のための教育—』44:10-15。

安村克己

2001 『社会学で読み解く 観光—新時代をつくる社会現象』学文社。

Summary

The role of study tour in international cooperation - Case from Cambodia -

Tourism has been used for developing countries as a harmless industry for many years. But since 1950's criticism of "mass tourism" came to be made. And from the 1980's a new tourism form of "alternative tourism" is appeared. One of them is a "study tour". This study tour has the features that "participants learn about the circumstances of developing countries and activities of NGOs," "participants can interact with the people of developing countries," "participants themselves participate in the program and cooperate." In addition, this tour is carried out by various organizations such as NGOs, and refers to tours centered on tours and inspection.

From the viewpoint of international cooperation, this tour has the role of an "opportunity" to connect participants to support activities for developing countries.

However, its role is not fully demonstrated. Because, as a result of omitting preliminary study in order to feel free to participate in the tour, the number of participants who are not very interested in international cooperation has increased.

It was not mentioned in this article whether future study tours will demonstrate the role as an "opportunity" of international cooperation or will enhance the characteristics as "tourism". I would like to focus on future study tours.

謝辞

本稿を執筆するにあたって、多くの方にお力添えしていただいた。この場を借りて感謝の意を示したい。

まず、2年間ゼミで熱心なご指導をいただき、本稿の執筆にあたっても多くの助言をくださった指導教員の関根先生にお礼申し上げる。先生が見守る中でのゼミの雰囲気はいつも温かく、のびのびと議論することができ、その中でたくさんのことを得られた。また、懇親会などの場では、人生における先輩として様々な助言をくださった。ぜひ、今後の人生の参考にしていきたい。

そして、同じゼミで学んできた同期、先輩、後輩にも感謝を述べる。ゼミの温かい雰囲気をつくっていたのは、先生だけではなく、関根ゼミのメンバーのおかげでもあった。また、本稿や独立論文を執筆する際に、互いに相談し合ったり、励まし合ったりしてきたゼミ生は、精神的な支えでもあった。

さらに、本稿を執筆するにあたって、様々な方が快くインタビューに応じてくれた。遠くに住んでいるために電話でインタビューに応じてくれた友人、仕事も忙しい中で協力してくれた社会人の方々、母語ではない日本語を使っのインタビューも快く引き受けてくれたカンボジアの方々など、彼らの協力がなければ本稿は完成していない。心から感謝申し上げます。

また、私をここまで育ててくれた家族にも感謝する。特に、母親は、卒論の時期に自炊をするのは面倒だろうからと手軽に食べられる食材を送ってくれ、その気遣いに感動した。私が行きたいと思った筑波大学に入るために浪人までさせてくれ、そのおかげで私は筑波大学で学ぶことができた。非常に感謝している。

最後に、4年間苦楽を共にしてきた友人に感謝する。友人たちがいたからこそ、本稿の執筆で苦しいことがあっても乗り越えられてきた。

改めて、本稿の執筆にお力添えをいただいた皆様に敬意と感謝の意を表し、本稿の結びとする。